結節点としての『廟』
—在日台湾人コミュニティにおける東京媽祖廟の建立—

東京都大学非常勤講師　鈴木　洋平
東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程　前野　清太朗

はじめに

2014年9月21日。新宿区JR大久保駅近くのビルに数十人が集まっていた。ビルに掲げられた扁額には「東京媽祖廟」と記されている。今回人々が集まったのは、開廟一周年を記念してのことであった。観衆の前で、東京媽祖廟理事長のX氏は「こんなに多くの来賓が台湾から、そして日本在住華僑の友が来てくれたことを嬉しく思います」と挨拶した。その後、4階建てのビルに祀られた神々の像に人々は思い思いに祈りを捧げた。東京媽祖廟開廟一周年式典には、国籍・地域・年代を異にするさまざまな人々がさまざまな理由のもとに行事を祝って訪れ、媽祖廟を訪れた人々の多様さは、30年以上前から媽祖廟建立に到るまでの経緯を反映している。「東京媽祖廟」とはいかにして形成され、今に至ったのであろうか。

媽祖とは、中国沿海部や台湾地域で多く信仰を集める女神で、航海や運送の安全に係り、現在では様々な人々の頼みに応える神とされている。東京媽祖廟は媽祖を主神とし、ビルの階層ごとに異なる神像をまつった形式をとっている。1階は集会場兼事務室となっており、2階は台湾の北港から分霊された媽祖像、3階は中国大陸の湄州から分霊された媽祖像、4階には観音菩薩像がそれぞれ祀られている。

移民として海外に移動した華僑・華人については、彼らを担い手として形成される「華人経済」と、彼ら華僑・華人のもつ「アイデンティティ」が二つの研究焦点となっていた（廖 2003:278）。華人社会の社会的・経済的関係をとらえるために注目されてきたのが、ネットワーク、あるいは関係（グワンシー）の概念であった（陳 1999:281-287）。このためネットワークあるいは関係（グワンシー）への着目は「華人特有の」関係構築への理解が中心的とされてきた。着目対象となったネットワークも、しばしば地理的制約を超えた人間関係であった。しかし、超地域的に見えるネットワークにあっても、特定の場を必要としないわけではない。現実の華人社会においては、族団、会館、華人学校といった具体的な場が成立している（清水ほか編 2014）。華人社会が生み出す場とネットワークの関係性の分析により、地域におけるネットワークの具体的な発現形態の理解が可能となるのではないか。

本稿では、華僑・華人のネットワークの中から成立する場のひとつとして、廟をとりあげる。具体的には、2013年に建立された東京媽祖廟を対象に、建立を主導してきた日本媽祖会の活動を中心とし
た在日台湾人社会における廟建立の形成過程を追う。次いで、そこに関わる人々のあり方について異なる立場から検討していく。日本在住の台湾出身者のいくつかの立場や、分霊元である北港の対応の中で、日台の関わりが続けられていく状況を説明する。台湾出身者の拠り所を目指して続けられた運動が、少しずつ異なる個々人の信仰心の集積により、廟としての実態を整えていく過程を紹介したい。

1章 東京媽祖廟の建立過程

前述した通り、東京媽祖廟を建立する際に最大の牽引力となったのが、1976年に台湾出身者を中心に結成された日本媽祖会であった。日本媽祖会は日本での媽祖廟建立を目的に、一時的な隠蔽や仮安座を繰り返しながら、久保保の東京媽祖廟に結実するまで、様々な計画を実施してきた。本章では建廟計画に到る過程について、その概要を紹介する。

1.1 日本媽祖会の設立

1978年、日本媽祖会は正式に発足した。会の発足に合わせて、主神なる媽祖像が準備された。台湾では新たな廟を開く際、以前から存在する有名な廟から霊力を神像に分けてもらう「分靈」「分香」と呼ばれる習慣がある（高橋1993:34-35）。日本媽祖会では、神像を台湾の雲林県北港鎮にある朝天宮から分霊した。神像は発足パーティーの行われた東京大飯店の一室に仮安座された。東京大飯店の社長のL氏は在外華僑の代表として立法委員をつとめた人物であり、華僑総会とも縁の深い人物であった。L氏は自ら会の発足に関わるとともに、東京大飯店専務であったG氏に事務的な折衝を委託した。G氏は建設予定地としてL氏が所有していた伊豆山荘の空き地を候補に挙げた。しかし日本媽祖会の法人格としての整備が済んでおらず、さらに実務を担当したG氏が早逝してしまうこともあり、この時の計画は頓挫した（日本媽祖会 2009:33）。媽祖廟建立の計画は進まなかったものの、この時に分霊元である北港朝天宮へ「進香」が始められた。進香とは、分霊元の廟と分霊先の廟との神像により行われる行事で、日本媽祖会により2014年現在も続けられている。

1.2 箱根での媽祖廟建立計画

創会初期の計画失敗の反省を踏まえ、進香を続けながらより日本の地域と連携した形での建廟計画が模索されていっていた。その過程の中で媽祖廟建立計画が浮かび上がってきたのが、箱根にある曹洞宗寺院である福寿院だった。

台湾には日本統治期からの曹洞宗系統の寺が残っていた。彰化県にある清水巖寺もその一つであり、住職は駒沢大学の出身で、福寿院住職のZ氏と同じ屋であった。寺の跡地がいなかったZ氏は、1976年

1 北港朝天宮は台湾でも有数の媽祖廟として知られる。北港は、日本媽祖会会長となったI氏の出身地でもある。
に清水巌寺と姉妹寺の関係を結んだ。清水巌寺からは二人の尼僧が派遣され、経営の手伝いを行った。東京大飯店のG氏は生前、伊豆山荘での計画が頓挫したのち、台湾と交流のある福壽院へ媽祖像を安置してもらっていた。こうした台湾との繋があり、台湾出身者は福壽院への参拝を行っていた。

現在の住職であるM氏が福壽院に派遣されたのは1989年のことであった。塩家がなく、運営の安定についても委託されていたM氏は、福壽院内を確認する中で、媽祖像を発見した。M氏によれば、媽祖像が明らかに仏像ではないことに気付いたものの、当初は何の神像であるかわからなかったという。机に出ていたところ、橫浜から来ていた台湾出身者から「こんな扱いをするなんて」と涙を流して抗議されたという。日本媽祖会の会長であつI氏も、媽祖像の扱いを心配し訪れ、あらためてM氏・Z氏と1氏をはじめとする日本人媽祖会の人々との交流が開始された。

これに前後して、当時の中華民国総統李登輝が日本媽祖会の活動を聞き、『聖徳東伝』と記した扁額の会への寄付を申し出た。李登輝の名代として訪れた李登輝の実父である李金龍に、日本媽祖会議長の1氏は日本に媽祖廟を建築したい意思を伝えた。これを聞いた李金龍は、ぜひ日本で行われる扁額の贈呈式に訪れたいと1氏に打診した。当時李金龍は92歳で高齢だったこともあり1氏も半信半疑であったが、李金龍の来日計画は本格化していった。

日本媽祖会でも李金龍を出迎える計画を進め、日本国内にある各種台湾出身者の団体に連絡した。福壽院住職のM氏も李金龍来日備の準備を呼びかけ、扁額寄贈の記念式典と記念行列「箱根観音媽祖菩薩祭り」の名称で実施することとした。祭祀に用いる各種の道具は台湾から購入し、箱根観音福壽院提供

一部は分霊元である北港朝天宮から寄贈された。箱根住民により李金龍の名前にもりんだ金色の龍踊りの人形も造られた。地元の神奥会をはじめとする地域住民が台湾の人々から踊り方を習い、出迎えの準備を行った。

こうして初年の「箱根観音媽祖菩薩まつり」は成功裏に終わった。箱根側からは有意により日本式の神奥と法被が北港朝天宮に寄贈され、北港で日本式神奥をかつぐ祭祀団体の金縁順（3章2節で詳述）が設立された。

箱根側、福壽院側では、日台交流、さらには国際交流の祭りとしていきたいという思いがあり、人々による手弁当の協力が続けられた。祭の開催時には宗教宗派を問わず各国の留学生がボランティアで参加した。地元住民による台湾への交流団の派遣や、媽祖の祭りである千里眼・順風耳の人形の作成も行われた。1997年までの7年間にわたり「箱根観音媽祖菩薩まつり」は続けられた。

祭の開催に並行して、福壽院での媽祖廟建立も具体的な計画が進められていたものの、最終的に管理主体等の問題が解決せず、廟の建立には到らなかった。現在も箱根福壽院内に「妈祖普薩祭壇」
として姫祖像が祭られている。

1.3 小岩での東京朝天宮仮安座

箱根での計画が頓挫したのち、日本暨会では日本各地にある姫祖を祀る神社や寺などとの交流を進めながら、姫祖神社建立の機会を模索した。中でも、江戸時代に天妃（姫祖）像が遷座したとされる青森県大間町稲荷神社との交流は現在も続いている。大間町では1996年に天妃像遷座300周年だったことを記念した「天妃様行列」が始められ、今に至っている。

交流活動の拡大を続けながらも土地の確保が問題となり、廟建立の目処は立たなかった。1氏は、まずどのような形であっても一般の人々が参拝可能な場所を作りたいと考えた。開廟にあたっては、寄付を受けるための法人格が必要なことが問題となった。そのため、将来的な宗教法人化を目標としながら、日本暨会朝天宮という一般社団法人を設立することとなった。

こうして開廟の準備が整い、1氏の親戚から借り入れた小岩にあるビルの一室に仮安座の形で「東京朝天宮」が作られることとなった。開廟に際して北港朝天宮よりあらためて二体の神像が供御されるとともに、廟に必要な祭具一式が購入された。1氏と同郷であり、以前よりの知人であってもK氏を代理仮名に迎えることで神像と神具が揃い、廟としての形式が整えられた。

小岩での仮安座によって、仮とは言え信徒が集まる場所ができた。その結果、台湾系メディアなどにも取り上げられ「社会的信用も高められた（日本暨会2009:4）」。信徒集団の「護持協賛会」も結成され、廟としての求心力が高まった。小岩は海に近く、海運の神でもある姫祖を設けるのに適しとされ、近辺での土地が探されだが、条件が整わず仮安座のまま6年程が経過した。

1.4 大久保での東京暨会廟建立

廟の建立を決定にしたのが、日本暨会総会会長のX氏による土地と資金源の提供であった。X氏は、以前より日本暨会幹部との交流もあり、最終的に暨会廟建立のスポンサーとして、大久保の土地と廟の建設費の大部分を提供した。X氏の負担による廟建立が決まったことで、日本暨会や1氏も建設の方針についてはほぼX氏の意志に一任することとなった。

こうした背景から、東京暨会廟建立後の活動は、次世代へと移りつつある。日本暨会は、当初の目的であった建廟を果たしたことで、暨会に対する信徒団体としての活動を続けている。管理経営の

-- 170 --

2 X氏は北港の出身ではなく、南投県水里郷の出身である。
3 かつての日本暨会では、台南会・台中会、李登輝政友の会などの日本統治期台湾からの引き揚げ者、一般日本人も参加していた。台南会や台中会などについては一時世代高齢化もあり、二代目に当たる人々が中心となっている。
人選はX氏に一任され、X氏から委託されたY氏などにより平常の廟管理が行われている。廟管理のボランティアについても、護持協賛会のメンバー、自ら廟を訪れた人によりまかなわれている。台湾の廟の管理者にあたる役職の燈主、頭家に当たる人物は、まだ正式に置かれていない。
現在の東京閥祖廟管理の中心人物であるY氏は、台湾新聞のインタビューで次のように語っている。

一番大事なのは、心の交流です。ビジネスではありません。東京閥祖廟は営利目的で造られたものではありません。皆様の心をどうしたら温めることができるかが肝心なことですし、心の拠り所になって欲しいと思います。

過去の建廟模様の時期と同様、現在の東京閥祖廟においても、各人の心の拠り所としての場所の確保が引き続き重視されている。新たな世代が運営管理の主体を担いつつある中で、初期の日本閥祖廟の人々が望んでいた日本における台湾出身者の人々が集まる閥祖廟の建立が実現した。

2章 門祖廟建立と個人
東京閥祖廟建立に到る過程の中で、縁返し重視されていたが人々の集まる場所としての廟建立であった。本章では、東京閥祖廟建立の過程に関わった人々が、どのような背景を持っていたのかを、三人の関係者の異なる立場から検討する。日本在住の台湾出身者のいくつかの立場や、分霊元である北港の対応の中で、日台の関わりが続けられていく状況を説明したい。

2.1 日本閥祖廟会長、I氏（90代、男性）
I氏は北港出身者である。同郷の伝手を頼って来日してからは、苦学しつと様々な事業を行ってきた。日本での公私活動の中で、心の拠り所となったのが、故別港の朝天宮に祀られた閥祖であっただという。個人的に閥祖像の分霊を行い、家族内で祀ってきたI氏は、在日の中で港出身者をする台湾出身者が心の拠り所とできるような閥祖廟建立を目指した活動を行い、それが日本閥祖廟発足の契機となった。東京閥祖廟建立に向けた動きの中心人物であり続けてきたI氏の日本における、日本閥祖廟と東京閥祖廟に関わる活動を紹介していきたい。

I氏は1920年代の雲林郷北港町（当時の台南州北港郡北港街）に生まれた。日本本土へ向かうきっかけとなったのは、北港出身の先輩で早稲田大学に通っていたQ氏であった。Q氏の弟で、I氏と同年齢のB氏が日本へ行ったことを聞き、自分も日本で何らかの成功をつかみたいと考えるようになったという。教育を受けて日本語を喋ることが可能であったことも後押しとなった。I氏の母は日本へ行くことに対する反対したため、地元の名士であったQ氏兄弟の父に依頼し説得した。こうして数え年で14歳に当たる1935年、I氏は日本へ向かった。

来日当初は、友人でもあったQ氏兄弟の住むアパートに、Q氏のB氏と同居していた。学業のプラ

4「東京閥祖廟代表 Yさんインタビュー」(http://blog.taiwannews.jp/?p=16914 2013年10月29日掲載) 台湾新聞ホームページより引用。
もっとも，水道橋の栄民学館に1年間通った。その後，目白商業学校の夜間学校へ編入し，目白台近辺にあった中華料理店で働きつつ通学した。学校卒業と同時に中華料理を辞職し，終戦後に中華料理店を開いた。当時は，戦中は神奈川県金沢で工場で働いていた人々が日本において，北港出身者数名，空襲を避けて東京近辺に来ていた。店員などの雇用は北港出身者でなかったという。中華料理店での利益を基にして豊島区を中心に各種事業を営んだ。練馬に居を構え日本人女性と結婚，子供が生まれた。1970年代半ば頃から，日本政府と中華人民共和国の国交回復に伴い中華民国と日本政府の国交断絶問題が生じ，在日台湾人に中に日本国籍を取得する動きが生まれた。1氏も，家族とともに日本国籍を取得している。事業の関係で与野市（現さいたま市）へ転居し現在に至っている。

1氏を中心に1976年に発足したのが日本媽祖会である。日本媽祖会は日本で事業を行う台湾出身者を中心としてスポンサーを募り，数度の頓挫を経ながら媽祖廟建立計画をつづけてきた。また，北港潮天宮に対する進香団を主催する団体の一つとして，故郷や潮天宮との縁がりを保つ役割も担った。1氏が朝天宮との縁がりによって媽祖への信仰を深めたことは，1氏自身が故郷との関係を深めていくことにも繋がった。故郷である北港に対して活動を続け，北港市街の河沿いには事業で得た利益の一部で東屋を寄贈するなどしている。

戦後の日本を中心に活動を続けてきた1氏が，日本媽祖会を結成することになったのは個人的な背景によるものであった。1氏によると，来日前は廟などに特別興味を持ってはいなかったという。

私は14～15（歳）で日本に来たからね，大人の社会は知らないんだ。さっぱり知らないの。･･･関心ないの。大人の社会だからね。何の神様かもわからない。たくさん神様いるからね。何にも知らないで来たからね。お袋さんと一緒にお参りに行くときは，お袋がこうやってるから一緒にやるだけですね，どういう神様が知らないの。

母に連れられて廟へ参拝していた程度で，1氏にとっては「大人のもの」であった。

1氏が廟に関わる契機となったのは，家族の難病であった。1970年代前後の医療技術にあっては治療困難とされる病気で，1氏も心労で白髪になってしまったほどだったという。余命半年と宣告された家族を連れ，手の施しようもなかったまま，1氏の故郷である北港を訪れた。

あと（余命が）半年しかない（と宣告された）から，薬がない，医療法もない，当時はね。そういうわけですね，じゃあ，最後に私の実家は台湾ですから，･･･台湾に連れて行って媽祖さんと伺ってただの。朝静かな時にね，雨降ってた時に，媽祖さんに，この子は医師の診断によってあと半年しか命がないと宣告されたけれども，どんなもんでしょうかと。なんて言うの，

---

5現在は1氏の長男が同地で歯科医院を経営している。また二人の孫は歯科医，産婦人科医となっている。
6以下，本節の引用は1氏への日本語で行われたインタビューより抜粋。カッコ内は筆者による。
くじびき、みくじをポエトしてね、二囲も三囲も。それで、最後に、解説してくれたわけですよ。その解説者が言うにはね、この子は今、半年で死ぬようなみくじではありません、と。ちょっとと見てごらん、今（外は）雨降ってるですよ。雨降ってるということは、みくじの内容はね、（舟が）山のでっぺんに来ている（という内容）わけですよ。で、まだ（今、外が）雨降っているということは、また下がる、舟が降りてくる可能性がある。これが天気だったら（晴れていたら）、山のでっぺんに残っちゃったら、これで、もう水がだめだ。と、そういう解説で。私も今、今のが進歩しているのに、まだ策がないのでね、半信半疑で聞いてたんです。結局、この子は、すぐ死ぬようなみくじではありません、と。今、雨が降ってるでしょう、だから心配要りませんよ、と言われたんですよ。私もちょっと半信半疑で。ところが、やっぱり、信じざるを得ないですよ。…それで、半年経っても死なないの。一年経っても、二年経っても、とうとうね…半年で亡くなるって言われたのが、30歳くらいの命が延びたかね。ということわけで、まるっきり命が长くなったわけじゃないんだ。ちゃんと将来まで生きてゆくて。それが一つの動機でね、呪符信仰になった。

故郷にある北港朝天宮で神の意志を確認したところ、意外にも「必ずしも死を意味する内容ではない」とのくじが出た。最初は半信半疑であったものの、朝天宮の主神である媽祖に加護を願ったところ、病状が安定し医師の診断よりも長く生きることができた。I氏自身の身边に生じた経験が、朝天宮の媽祖を分霊して自宅に像を置き個人的に祀るきっかけとなっている。

I氏は北港朝天宮との関わりを維持しながらも、自身の経験もあり、日本に来て苦労している在日台湾出身者が日本にいながら媽祖を拝むことが可能な場所を作ることを祈念するようになった。その理由について、I氏は以下のように語っている。

あそこで祀り始めた理由。やっぱりね、家に置いたら誰も知らないので、…華僑の人にはやっぱり色々な悩み事があるでしょう、求職時期や家庭の問題とか子供の教育問題とかね、色々何か抱えているわけですよ、悩み事が、…華僑はどうしても孤立した生活ですから、悩み事もいっぱいあるわけですよ。媽祖さんにはいろいろお祈りしたり、媽祖さんに向かって心からはき出して、こういう悩み事、みくじもあるから、気が楽になるでしょう、いくらかでもね。そういう目的で、廃を作ったわけです。みんなの悩み事を軽くするために、神に祈って、心がすっとする。

7 廃などにおいて神の意志を判断するための道具の一種。片方の紙が揺らみ、もう片方の紙が平らな半月形に近い二枚の木片を利用。一組になっている二枚の木片を投げ、その表裏によりみくじなどの判断を行う。
8 くじ（蓋籠）の原文は「呪内正逝羅李開  用尽心機總未休  作福間神難得過  恰是行舟上高築」。
このように、在日台湾出身者の抱える心理的問題を少しでも和らげられる場を作りたい、という思いが、日本に髪祖廟を造ることを目的とした日本髪祖廟の活動へとつながっている。

小室における東京朝天宮仮安座も、1氏が主導したものである。1氏の親族に依頼してビルの一室を提供して賃っている。その際も、あくまで「仮安座」であることにこだわり、正式な安座場所としての廟建立を求めるコメントを発している（日本髪祖廟 2009:4）。あくまで、1氏の希望は髪祖廟の正式な建立にあったと言える。現在は、東京髪祖廟理事長の職にあるが、自身の役割は廟建立で完了したとしており、理事長も名目上のところであると述べる。東京髪祖廟の管理運営はX氏に一任する形で、時折廟を訪れている。

2.2 金懿順会長、II氏（60代、男性）

I氏が髪祖廟建立に向けて奔走する中、分霊元である北港朝天宮への進香は継続的に行われてきた。進香における朝天宮側の受け入れ団体として機能したのは「北港朝天宮金懿順髪祖廟会（以下金懿順）」であった。金懿順は北港朝天宮の祭祀組織で、1991年にS氏が設立し、現在の会長はH氏が務めている。設立当初の147人から、2014年現在で名簿上210人を数える。組織は「組」と呼ばれる5つの団体に分かれ、各組に組長がいる。組長は各組構成員への連絡係を担う。金懿順への参加呼びかけは組長が行うため、各組ごとで構成員の数に差がある。

参加地域は朝天宮のある北港を中心としながら、雲林県・嘉義県の他地域から参加する人々もいる。毎年の活動費用は主に会員からの年会費（1000元）でまかなわれている。朝天宮での祭祀に用いる衣服などの消耗品については、理事長が事務的に負担している。

日本祥瑞検問が箱根福寿院から北港朝天宮に送られたことが、金懿順結成のきっかけとなった。当時、北港獅子会（ライオンズクラブ）は箱根ライオンズクラブとの交流を行っていた。獅子会で活動していたS氏が初代理事長として祭祀団体としての金懿順を結成した。S氏は箱根時代の髪祖廟建立計画にも積極的に関わり、3度にわたって箱根観音髪祖募集に参加している。現会長のH氏夫婦が金懿順に関わるきっかけとも北港獅子会の活動であった。H氏の生まれは北港鎮に隣接する雲林県水林郷である。兵役後に北港へ移り住み玉石販売業を営んでいる。夫婦ともに獅子会に参加していたことをきっかけに、まずH氏の妻が金懿順に加わり、のちにH氏自身も参加するようになった。

金懿順は、日本髪祖会が北港を訪れる際の受け皿としての役割を担ってきた。北港出身者であるI氏が親族を通じて連絡を入れることで、金懿順や北港朝天宮から日本へ人を派遣するなどの手配も行ってきた。東京髪祖廟の落成式にも北港から金懿順のメンバーをはじめ39人が参加し、会の名義で10万元を寄付している。金懿順は日本髪祖会が進香団としての形式を整える上で不可欠な存在であった。

一方で金懿順は、あくまで朝天宮に対する祭祀団体としての活動を中心としてきた。箱根から送られた日本式の神輿や法被は、他の祭祀団体と金懿順の性格の違いを明確に示すものとして効果的に機能している。
能している。毎年旧暦3月23日に行われる媽祖祭の際には、朝天宮の文化大樓に置かれた神衹の中
に媽祖像が移され市街を練り歩く。台湾とは異なる形の神衹を担ぐことに反対はなく、むしろ中心とな
っていた獅子会のメンバーハは他の祭礼団体との違いを喜び、籍根の神衹会から担ぎ矢や歩き方の指
導を受けたという。日本式の神道を積極的に取り入れながらも、台湾の祭礼団体が用いる旗や提灯を
付け加えるなど自分達での改良も行っている。北港における金徳順の主要な立場とは「日本式の神道
などを特徴にした祭礼団体」と言えよう。H氏にとっては、金徳順は北港にある複数の祭礼団体の一
つとして認識されている。H氏は金徳順以外にも、三太子会と土地公会という異なる祭礼団体に参加
している。祭礼団体の他にも消防団や太極拳の会の会長を務めるなど、地元の活動の多くに積極的に
参加している。H氏にとって金徳順に参加することは、H氏がつとめる北港の団体活動の一つである。

日本と北港での位置付けの違いが生まれる背景には、東京媽祖廟と北港朝天宮の関係が「進香」と
いう関係を取っていることが関係している。進香は、分護先の廟から分護元の廟を訪れる形を取り、
時に、「神の里帰り」などとも称される。そのため、北港側の組織である金徳順にとっては、東京媽
祖廟の存在は、あくまで分護先である。分護元である北港の代表として、金徳順は日本側の人々を出
迎えていると考えられる。

2.3 日本馬祖文化協会代表理事、K氏（80代、男性）

K氏は建廟の主体として、日本における台湾出身者のための廟建立を主導してきた立場であり、H氏
は北港代表として日本からの進香を受け入れる立場を担ってきた。この二人とはやや異なる立場から
日本馬祖会と媽祖廟建立の活動に関わり、日本における媽祖廟としてのあり方について探索を行って
いるのが、K氏である。K氏は、仏教研究者としての活動の一環として、日本における媽祖廟建立や媽
祖信仰の普及に独自の立場から関わってきた。I氏・H氏・K氏の活動の多面性は、そのまま台湾にお
ける廟という存在の多面性を示すものと言える。

K氏は1930年代の生まれで、北港郊外の集落出身である。13歳の時、現台南市関子嶺にある碧雲寺
で出家し、戦後しばらくは高雄県の寺に身を寄せていた（呉氏 2006-20）。1947年に台南の竹溪寺
へ移り住み、6年間にわたって寺の管理運営に努めた（呉氏 2006-24-25）。21歳からは新竹に行き、
中国大陆から台湾へ来た印順法師から本格的に仏教を学ぶ機会を得た。その際に中国語も学んでいる9。

新竹で8年を過ごし、1961年、30歳でより専門的に仏教学を学ぶことを志し日本留学を決意した。
当初の留学費用は竹溪寺と竹溪寺が属する関元寺、そして故郷の北港朝天宮が負担した（呉氏 2006-179）。同郷出身のI氏が来日時の保証人となり、その後日本で交流を続けることとなった。

向学心の強かったK氏は、駒澤大学では大学編入ではなく学部から入学し、バーリ語と原始仏教を
学ぶ中で自己の関心を深めていった。その後、当初予定していた滞在期間を超過することとなり、
奨学金も打ち切られてしまった（呉氏 2006-179）。仏教学を学び続けたいと考えたK氏は、通俗し
て様々なアルバイトで生計を立てながら苦学を続けた。1965年には大学院に進学し、同年に台湾の埔

9日本統治時代の台湾の人々は、母語であるピン南語や客家語、原住民諸語のほか、共通語として日本
語教育を受けており、中国語を習得する機会は少なかった。
里出身の女性と結婚した。K氏の義父も日本留学経験者であったことが縁になり、結婚することになっ
tったという。大学院では働きながら仏教学を学び続けた。その後、大学での非常勤講師を勤めると
dで日本国籍を取得。妻とともに子育てをしながら、中華料理の懐菜店や薬局で生計を立てた。

K氏は現在、生活のほとんどを日本で過ごしている。故郷に親族や一族の墓もあるが、自身が末子
であり、ほとんど行くことはないという。I氏とは異なり、北港と故郷としての関係を積極的に構築し
ているわけではない。K氏と台湾との関係で、軸となっているのが仏教研究による人間関係である。K
氏を中心として、高雄市内の元享寺と連携して1986年に開始されたのが、「南伝大蔵経」の漢訳プロ
ジェクトであった。台湾時代の師である印順師法師を顧問に迎え、大学時代の恩師である水野弘元氏の
協力も得ながら、バーリ語仏典の漢訳を15年にわたり行った（見老執 2006:277-279）。かつては元享
寺の仏学研究所所長も勤めており、現在は職を辞しているが、元享寺との関係は今も続いている。以
上のように、K氏の主たる経歴は仏教研究者としてのものである。

日本媽祖会においても、K氏が北港出身者でもあったことから、初期の活動から参加を続けてきた。
日本における媽祖廟建築計画に具体的に関わることとなったのが、小岩での東京朝天宮仏像建計画の
際であった。北港朝天宮から媽祖像の分霊を行うなどの行事に、代理住持として参加している。以降、
小岩に仏像安座が行われていた時期に、東京媽祖廟完成までを代理住持として過ごしている。

K氏が力を入れてきたのが、日本における媽祖研究の進展である。媽祖に関する研究が中国大陸や
台湾におけるものを中心としており、日本に来た媽祖に関する研究があまり進んでこなかったことに対
して、K氏は貢献したいと考えていた。小岩時代に、K氏を代表理事とした一般社団法人日本媽祖文
化協会が2007年に入会された。2014年の協会パンフレットでは「日本の天妃（マソ）様の寺社、宮廟
と一層緊密に連携し、媽祖文化を推進致しを存じます」と書かれている。日本各地の媽祖を祀ると
される寺社・廟を巡り「媽祖観音像」の配布などを行う予定であるという。協会の運営方針にも、日
本での媽祖信仰普及への意志が示されている。協会参加者は台湾出身者に限定されてはおらず、パン
フレットにも中国語・日本語が併記されている。「媽祖文化」の理解を高めることを目指した発表会、
K氏による講演会を定期的に開催している。研究の成果として『媽祖文化源流考』という本を中国語
でまとめており、日本語でも出版を予定している。K氏は以下のように述べる。

観音様も、インドから中国に来る時に変わった。髪の毛も変わった。着物も変わった。だから
媽祖も変わってもいい。

K氏の活動は、台湾における分霊元である北港朝天宮を軸とするものではない。K氏は、台湾や中国
本土から分霊してきたという背景は重視しながらも、各地の状況に合わせた媽祖のあり方を肯定して

---

⑩義父は自身の経験から、K氏の子供達に台湾語を教えさせなかった。台湾語を覚えることで、日本
語のイントネーションが揺れることを危惧したためだという。そのため、K氏の親族は台湾では英語
で会話をしている。K氏の状況は、台湾出身者の持つ複雑な言語環境を反映したものと言える。

⑪K氏への日本語で行われたインタビューより抜粋。
いる。日本全体の媽祖に関連する施設との連携も意図しながら、新たな媽祖廟である東京媽祖廟と、
日本における時代的幅を持った媽祖信仰を通じ合わせている。

おわりに 結節点としての廟

以上のように、東京媽祖廟の建立過程と、それに関わってきた中心人物の活動を検討した。第1章で
は、媽祖廟成立を目指した日本媽祖会の活動と、数度にわたる挫折を経て現在の東京媽祖廟完成に至
る経過を紹介した。伊豆、箱根、小岩、大久保と建廟計画が推移していく過程で、日本媽祖会がとっ
た立場はそれぞれ異なったものであった。1970年代、日本媽祖会は結成時の人脈から伊豆での建廟を
計画したが諸問題により挫折した。その後、台湾出身者を中心とした北港朝天宮への進香団体として
活動を続け、1980年代末には初期に分霊した媽祖像による箱根福寿院での建廟計画を進めめた。同時に
日本媽祖会は「箱根観音媽祖懸壇祭り」のサポート役をつとめた。箱根での計画頓挫後は、北港朝天
宮への進香を維持しつつ、日本各地の媽祖関連の寺廟との連携を進めめた。さらに、小岩での仮安座に
より日本国内での知名度を高め、土地・資金面の問題を解決し得る方法を得て、現在の大久保での建
廟にいたった。建廟を終えた現在は、媽祖に対する信徒団体としての活動を続けている。

日本媽祖会の果たした役割は様々であるが、いずれの時期にあっても共通していたのが、日本に台
湾出身者が集合し得る心の拠り所となる廟の建立という目的であった。こうした長期の活動の中で、
媽祖廟建立計画を維持してきた人々の意志は、個々人が持つ信仰を集める場の必要性、すなわち日本
の地にあたることの必然性を推進力として維持されてきたといえよう。

以上のような展歴を経て、現在の東京媽祖廟が造られるにいたった。こうした30年以上にわたる歩
みが、日本媽祖会に関わり、数度にわたって分霊されてきた複数の媽祖像の居所にも示されている。

① I氏自宅の媽祖像： 日本媽祖会結成のきっかけともなった主人公の経験の中で分霊してきた
媽祖像。30年前に1家に分霊され主に個人宅で祀る目的としていた。小岩での仮安座の際、新たな媽祖
像が分霊されるまでの間、廟の主像としても扱われていた。現在では、ふたたびI氏宅に置かれている。

② 箱根福寿院に置かれた媽祖像三体： 1976年、日本媽祖会結成時の計画に合わせ分霊されてき
た媽祖像は、伊豆での建廟計画挫折後に箱根福寿院へ預けられた。のちに箱根での媽祖廟建廟計画が
進められる中で、1990年頃に新たな媽祖像が分霊された。現在モこの2体の媽祖像が、箱根福寿院内に
安置されている。

③ 東京媽祖廟の媽祖像2体： 小岩での東京朝天宮仮安座に伴い、北港朝天宮より新たに分霊さ
れてきた媽祖像。廟の主神である東風媽（鎮殿媽）と、進香時と信徒によって運ばれる新京媽（進香
媽）の2体が同時に分霊されており、いずれも東京媽祖廟の2階に安置されている。

こうした多様な媽祖像の存在が、東京媽祖廟が様々な背景を持つ人々の活動の中で、今に至るまで
的事情を物語っている。廟が建てられるまでに集まった、個別的な人の「信仰」が積み重ねて行く中で廟
としての立場が固められていった。

⑪ これら媽祖廟として祀られた媽祖以外にも、I氏が個人的に媽祖像を祀っているように、公開して
はいないものの、個人や集団で媽祖を分霊してくる例は多い。
第2章では、東京媽祖廟建立に関わりを持つ三者の活動について検討した。I氏、H氏、K氏はいずれも、東京媽祖廟や媽祖に対してそれぞれ少しずつ異なった認識や目的のもと、活動を行っている。I氏の立場は、日本側から媽祖廟を建てたいと考える人々の意志を代表している。一方、H氏の立場はこうした日本側の要請に対する台湾側の受け入れ方を示すものとなっている。すなわち、I氏に代表される個人の意思としての信心に発した台湾出身者のエネルギーが廟をつくる必然性を誇引してきた。H氏に代表される台湾（北港）側は台湾出身者のエネルギーを自らの文脈の中で位置付けるものとして全意順を成り立たせてきた。K氏は新たな日本における媽祖廟のあり方を模索することで、新たな人々を媽祖廟に引きつけてきた。このような三者は異なる方向性を持ちながらも、いずれもが東京媽祖廟を成り立たせる原動力となってきた。

以上の検討からも示されているように、場所の計画は数度にわたり移動しながら、いずれも信徒が集まる簡便な場所の確保が重視されてきた。たとえ建廟という具体的な形を取れなかった時期においても、人々は進香などの活動を通して日本と台湾をつなぐ信仰のエネルギーを維持することで、媽祖廟に人々が集まるための道筋を作ろうとしてきた。多様な要望、目標を持つ人が集積する結節点として東京媽祖廟が成り立っている。場所としての廟と、個々人の信仰心が集約することで、はじめて廟としての実態が整うのである。今後、廟のあり方と、人々のエネルギーの奔流がどこへ向かうのか、引き続き注目していきたい。

【参考文献】
郭慶文編（1993）『大甲媽祖停往北港進香史料彙編』信港媽祖文教基金會
呂老拙口述、卓遵宏・侯坤宏取材、周維朋・王千慧・莊豊吉整理（2006）『台湾仏教－甲子：呂老拙先生訪談録』国史館
呂老拙編著（2014）『媽祖文化源流考』財団法人北港朝天宮
清水純・潘宏立・庄国土編（2014）『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』風閣社
高橋晋一（1993）「巡礼のネットワークー台湾の「進香」を事例として」『しんか』第4巻9号
陳天鑒（1999）「華人研究とネットワーク論」飯島徳雄編『華僑・華人史研究の現在』汲古書院
日本媽祖会（1996）『潮』第18号、日本媽祖会
日本媽祖会（2004）『日本媽祖会創立二十五周年紀念特刊』日本媽祖会（私家版）
日本媽祖会（2009）『日本媽祖会創立三十周年紀念特刊』日本媽祖会（私家版）
北港朝天宮金恵順媽祖繞班会（2011）『北港朝天宮金恵順媽祖繞班會第一屆第二次會員大會手冊』北港朝天宮金恵順媽祖繞班会
北港朝天宮金恵順媽祖繞班会（2014）『北港朝天宮金恵順媽祖繞班會第三屆第一次會員大會手冊』北港朝天宮金恵順媽祖繞班会
松根豊満（1991）「箱根観音の媽祖祭」『大法輪』第58巻第6号
廖赤陽（2003）「在日中国人の社会組織とそのネットワークー地域化、地域化と国家」遊仲敷先生古稀記念文集編集委員会『日本における華僑華人研究』風閣社